

ミーティアート・オンライン

I love ?

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ソードアート・オンライン、アルヴ Heim オンライン、ガンゲイルオンラインと様々なVR世界の事件と関わった比企谷八幡が、VR世界で遊ぶ話です。

# 目次

第3話	第2話	第1話
13	6	1



# 第1話

突然だが、俺、比企谷八幡はSAOサバイバーである。SAOサバイバーとは、世界初のVRMMORPGである『ソードアート・オンライン』を生き延びた人達のことを指すネット用語だ。

四千人もの命を奪った未曾有の重大事件を引き起こした茅場晶彦が造り上げたナーヴギア、及び『ソードアート・オンライン』というゲームでは、ゲームオーバー……つまりHPの全損＝死という絶対的なルール……いや、ペナルティがあった。

しかし、そんなデスゲームを《黒の剣士》と呼ばれていたプレイヤー名キリト——本名桐ヶ谷和人がクリアして、俺含む生存者約六千人は無事にログアウトした。

そのあと、リハビリを終えた時くらいに、アルヴヘイムオンライン、現実世界の生活が安定してきた時にガンゲイルオンラインという仮想世界でも色々あり……いや、本当に色々あったわ。その結果キリトハーレムが拡大したのだが、桐ヶ谷には既に本命がいるらしい（ただしいっちゃ悪いがヘタレなため、未だ想いを伝えることはできていないらしい）。

その本命とは、俺と同一年の幼馴染みであり、レクトという会社のCEO結城彰三氏

の娘である結城明日奈だ。

かつて結城はアインクラッドで《閃光》の異名をとるほどの凄腕細剣使いプレイヤーで、SAO最強ギルドである《血盟騎士団》副団長で、SAOのアイドル的存在だったが、男性プレイヤーにとつては高嶺の花どころかアルプスの花だったそうで、（システムののだが）結婚を申し込まれたこともあるそうだが、潜水艦の如く全員沈没。まさに攻略不可能の無理ゲーだったらしい。

結城の友達である、アインクラッド内では俺も世話になった鍛冶屋を営んでいたプレイヤー名リズベット……本名篠崎里香によると、既に想い人がいるらしい。なんで俺に言ったのかは、未だ謎だ。ちなみに篠崎はキリトに好意を寄せているハーレムの一員だ（本人に言っても頑なに認めないが、態度でバレバレなのである）。

ここで、何故一般ピーポアの俺と、お嬢様と言っても過言ではない結城が関わりがあるかを説明すると、昔住んでいた家の近くの幼稚園に俺は通っていて、結城もそこに通っていたのだ。

俺が三歳か四歳の頃に通っていた幼稚園で、立派な家柄ゆえに纏われていた空気のせいか、結城は全くと言っていいほど周りと馴染めなかった。あの頃の俺も、さすが俺というべきか、結城と同じかそれ以上に周りに馴染めなかった。

それでもあの頃の俺はまだ純粋な心を持っていたため、同じように孤立していた結城

に一緒に遊ぼうと声を掛けたのだ。最初は拒絶されたが、あの頃の俺は一人で遊ぶ方法を思い付く程の発想力はなかったため、何度も何度も結城を遊びに誘った。

やがて幾度の誘いに「一度だけね」と折れた結城は俺と遊び始めた。思いの外楽しかったのか、その日を境に毎日のように俺達は遊んだ。鬼ごっこ、かくれんぼから泥団子作りまで、様々な遊びをした。

しかし俺は一つ思い違いをしていた。確かに結城が馴染めなかったのは家柄のせいでもあるが、男子にとっては高嶺の花、女子にとっては疎ましい存在だったのだ。

俺は男子からはさも遊びの延長かのように砂を投げられたり、酷いときには石を投げられたり、直接殴られたりした。

それだけならまだよかったが、ある日見てしまった。——結城が、他の女子達に殴られているところを。

カツとなった俺は女子達を思いっきり殴ってしまい、女子達は大泣き。俺は一躍組の悪者になった。ことは親を呼んでの話し合いになってしまった。

不幸中の幸いと言うべきか、幸い結城へのイジメはなくなったが、それだけの悪意に当時の俺は耐えられず、次第に幼稚園に行かなくなり、通わなくなるくらいならばと俺達一家は逃げるように千葉に越してきた、という訳だ。

そんな出来事があってから約十三、四年後の現在の俺の環境を説明すると、十八歳の

男、東京都内に一人暮らし、脳やVR技術に少し興味があるだけのSAO生還者のために建てられた学校の高校三年生（クラスはなんの因果か結城と同じ）だ。

なぜ一人暮らしなのかは単純明快。学校が遠いから近いところに住んだ方がいい……という建前で、親父が二年も会っていないかった分俺にベツタリな小町から俺を引き離したいから一人暮らしをさせられている。当然俺は抵抗したが、その学校しか受け入れて貰えないだろ？という言葉に弾丸のように完全に論破された。

小町は現在実家から、千葉市立総武高等学校というなかなかレベルの高い進学校に通っているらしい。

それでも週一、少なくとも月一くらいで部屋に来て飯を作ってくれるのは、八幡的にポイント高い。カンストするくらいだ。

今年を受験生の俺だが、アルヴヘイムオンラインという自分達が妖精になって空を飛んだり、魔法を放ったり、五月のアップデートでソードスキルを放ったりして遊べるゲームをしている。種族は影妖精（インプ）。顔は現実と変わらないが、髪型はアホ毛以外の癖ツ毛が切られている。

「さて……そろそろ行くか……」

ナーヴギアの後継機であるアミュスフィアを頭に被り、固い感触のベッドに敷かれている敷布団に仰向けで寝る。



「リンクスタート」

三年前は俺達の意識を二年も閉じ込めた言葉だが、今は違う。何の躊躇いもなく俺は仮想世界へとフルダイブする魔法の言葉を唱えた。

## 第2話

仮想世界（アルヴヘイムオンライン）にダイブして、思わず眩しさに目をつぶり、ゆっくりとまぶたをあけると、見慣れた店の中にいた。

今いるメンバーは、桐……じゃなくてキリト、リーファ、アスナ、リズベット、シリカ、それにユイ……か。

「パパ、どうやらヒキハさんが来たみたいです」

「ん？よう、ヒキハ。来たんだな」

「……おう、キリト。今日は何すんだ？」

ソファアにどっかりと座っていたスプリガン——キリトに声を掛ける。特徴は全身真っ黒なことだ。キリトをパパと呼ぶ少女はユイという。色々訳ありだが、優秀なサポーターだ。こうして部屋を見回していると、なんか酒池肉林に見えることもないが、実際にハーレムを築いているのが腹ただしい。爆発しろ。

「そうだな……今いるメンバーで、なにかクエ行こうとしてただけど……」

「丁度いい感じのクエストがあったよ、お兄ちゃん」

キリトをお兄ちゃんと呼ぶのはリーファ——本名桐ヶ谷直葉。種族はシルフで特徴

は……あれだな、二つのエベレスト。

「おー、どれどれ……えー、クエスト名は《巨人狩り》……内容は、《ギガ・ヒューマン》二十体の討伐、か」

うえ、あいつめんどくさいんだけど。攻撃は単調だけど、HPが多いし……

「もー、顔にめんどくさいって書いてあるよ、ヒキハ君」

揺り椅子にもたれ掛かっている俺に声を掛けてきたのは、幼馴染みのウンディーネ、アスナだ。特徴は髪型だ。

「だってあいつめんどくせえじゃん……」

「そのやる気のなさをなんとかしなさいよ、あんたは」

呆れた声で言ってくるのはキリトハーレム初号機ことレプラコーンのリズベットだ。特徴は鍛冶屋なのにメイド服っぽいのを着ていること。

「そうですよ。ゲームにもやる気を出せないなら、出すところがないんじゃないですか？」

礼儀正しい口調で注意してくるのは、キリトハーレム零号機のシリカだ。特徴はフェザーリドラのピナ。

「いや、妹を愛でるときは常にやる気を出してるぞ？」

「相変わらずのシスコンぶりだな……」

苦笑するキリトに同調するように全員頷く――が。

「……………どうした？アスナ」

「へ!? ううん、なんでもないの」

顔を赤くし、首を横に振り全力否定するアスナを見て、キリトが悲しそうな顔をする。更にそれを見て、リズベツト、シリカの二人が嫉妬が混じった眼でアスナを見る。最近よくある一幕だ。

二人が嫉妬の視線を向ける↑わかる。キリトが悲しそうな顔をする↑わかる。アスナが顔を赤くする↑何で？

「(うう、一瞬小町ちゃんに羨ましいって思っちゃったよ)」

なにやら煩惱を払っているように頭を振るアスナを見ながら、キリトに確認をする。

「じゃあ、今日はそのクエストでいいんだな？」

「あ、ああ。それじゃあ、行こう！」

「「「「オー！」」」」

元気なことである。元気が有り余って魔法とか誤射されないか怖いでござる。

「ウオオオオオッ!!」

キリトのヴォーパルストライクが、深々と巨人の腹に刺さり、巨人はグオオオ……と  
いっどこか悲しげな声を残して爆散した。

「あいつチート過ぎるだろ……」

スキルコネクトって……二刀流だからこそできる芸当だ……

「ヒキハ君も大概だと思うよ……何よシステム外スキル《第六感》って」

「……い、いや、あれはやろうと思えば誰でもできるぞ?」

「……ふうん、どうやって?」

胡散臭げに首をかしげて訊ねてくる。そんな信用ありませんかね……

「まず直感ってなんだと思う?」

「えっ? うーん……危険をなんとなく感じること?」

おお、かなり正解に近いな。かなり抽象的だが。

「まあ大雑把に言えばそうだな。ハッキリと認識していない違和感が、重なり重なって

なんとなくヤバいと感じる、これが直感だと俺は思ってる」

「……直感と第六感は何か関係あるの?」

「……ん、ああ。まず目に見えないところから攻撃されたとするだろ? そうすると、攻撃を喰らう前に聴覚とか触覚がなにかしらキャッチするんだ、音とか空気が動く感触とかな。それが第一段階」

「……まさか、それ全部キャッチしてるの?」

まあボツチゆえに鋭敏になった感覚神経がないとできないのかもな。主に視線に敏感です。

「ああ、まあな。んでキャッチできるようになったら常に意識を張り巡らせて、いつもと違う違和感が解るようになったら第二段階」

「待って、おかしい。何かおかしい」

アスナが何か言っているが、ノープロブレム。大丈夫、問題ない。

「最後に意識を張り巡らせて、無意識に察知できたら完璧だ」

「ナ○トの螺旋丸かよ……」

突っ込みありがとうキリト君。ぶつちやけ狙ってました。習得に三年もかからなかったけどな。

「……やっぱりこんなことできるのヒキハ君くらいだよ……」

諦めたらそこで試合終了ですよ……しよっちゅう俺は諦めるけどな。

「ほら、巨人がリポップしたぞ。行け、キリト」

「いや、あんたもやりなさいよ！」

別にいいじゃん……SAO最強プレイヤーのキリトがいるんだから……これ以上はオーバーキルですよ？リズベツト君。

「さつきは俺、リズ、リーファ、シリカで倒したから、次はヒキハ達やれよ」

見事にハーレム軍団で倒したな……愛は力つてか、あん？

仕方ないので寝転んでいた芝生から起き上がり、傍らに置いていた俺の得物——ダブルセイバーを構える。

リポップした巨人が大剣を振りかざしてくるので、手首を軸に刃を相手の剣の腹に当て、攻撃の軌道を僅かに逸らす。このダブルセイバー系統の武器は、手首を軸に変則的でトリッキーな動きができるのでかなりのお気に入りだ。

次の攻撃モーシヨンに入らせず、こちらは懐に入り込み、二連撃十字斬り《クロス・エッジ》を発動。血色に包まれた刃は、同じく血色の十字のダメージエフェクトの痕を相手に残した。

「す、すごいです……」

「ああ、さすがが攻略組でも最強と名高かったヒキハだ。《アスエッジ》の二つ名があった

だけはあるな……」

黙れ、《黒の剣士》。俺をその中二臭い名前で（勝手に）呼ばないで……

相手がノックバックしている間に技後硬直が解け、腰を落とすし、左手を下げて逆に右手を上げる。二連撃投擲スキル《スピン・ブーメラン》だ。

放たれたダブルセイバーは、まず巨人の左脇腹を抉り、ブーメランのように戻ってきた二撃目で右脇腹を抉り、上半身と下半身を真っ二つに分けたと思ったら、《ギガ・ヒューマン》は眩しいほどの光を発し、爆発した。

「「うわあ……」」

「あんまりユイの教育に悪いものを見せるなよ、エイト」

「さすがに酷いよ……ヒキハ君……」

若干……いや、かなり引いている五人に、俺に注意をしてくる親バカキリトとオカンアスナ。お前らもう結婚しろ。

「えー、倒したのにそんな反応？」

ならお前らやれよ。なんでこんな天気がいい日にむさ苦しいデカイおっさんと戦わなきゃならんだ……

この後のクエスト進行は、キリトが無双しているのを見て熱っぽい女子達を芝生に寝そべりながら見ているだけでした……もう一度言おう。リア充（キリト）、爆発しろ。



## 第3話

とある日に、俺の時計兼暇潰し道具のスマホが鳴った。

「お、お兄ちゃんのスマホが鳴るなんて、一体誰から？」

偶然飯を作りに来てくれていた小町が戦慄したように言うが、甘いな。

「バッカ、お前、スマホなんて超鳴るよ？主に小町からのメールとか、Amazonからとか、戸塚からとか、マックとか、小町からとか、戸塚からとか」

それ以外はスパムメール。ていうか、親からのメールがないんだけど……放任主義過ぎませんか？別に欲しいわけでもないんだけどさ……

「いやー、お兄ちゃん。さすがに小町と戸塚さんへの愛が重いよ……」

「ほっとけ」

スマホを放り投げ、今は絶滅しかけているVitaちゃんのお操作を再開する。

「……お兄ちゃん見とかなくていいの？」

「小町ここにいるし、九十五パーセントスパムだ。五パーセントなんて誤差だから、切り捨てていい。なんならスパムメール削除しといてくれ」

「さすがはごみいちゃん……」

ごみと言っても言った通りにしてくれる小町は、やはり可愛い。

「……………ん？お兄ちゃん、これスパムじゃなくて明日奈さんからだよ？」

「げ……………」

結城から、だと……………大抵ALLOに関する事だけど、めんどくせえ……………

えーと、なになに、内容は……………

『休みだし、どこか遊びに行かない？勉強の息抜きも兼ねて』

なんで俺を誘う。誘う人物のチョイスが違うだろ。俺じゃなくて桐ヶ谷と行け、桐ヶ谷と。

『俺は別にいいから、桐ヶ谷と行け』

行かないことを意思表示しつつ、さりげなく桐ヶ谷にもフォローを入れる俺、マジ大人。

返信が来た音楽が流れ、再びスマホをいじる。

『なんで？』

……………いや、汲み取ってやれよ。せっかくフォローしたのに、この鈍感。

『……………桐ヶ谷に遊びに誘われたことないのか？』

送信。あいつらは鈍感同士だから、相性良さそうなのにな。

送信十数秒後に返信が来る。……………早くね？

『?ないけど』

あのヘタレ……キザなこと言うくせに、ゲームが絡まないと俺並みにヘタレだ……  
どんだけナイーブなんだ、シ○ジ君かよ。

『おう、じゃあいい機会だから、二人で親睦を深めてこい』

ここまでフォロワーしたんだ……フォロ谷と言われてもいいレベル。

『?キリト君のことはSAO時代から知ってるから、充分深まつてると思うけど……』

め、めんどくせえ……人の恋路をフォロワーするもんじゃないな……メールって疲れる

……

「小町ー。適当に返信しといてくれ」

「あいさー」

出来ぬなら 任せてしまえ 慣れぬこと 八幡

心の一句を読んで、スマホを小町の方に投げる。見事にキャッチした小町は、誰にかは知らないが返信を打ち始めた。

どれくらいそうしていただろうか。V i t aで遊ぶのをやめ、一応受験生なので勉強していたらインターホンが押された。……嫌な予感がする。

「はいはい」

「待て、小町。居留守を使うぞ」

俺の制止をお構い無しに、小町の手によつてドアが無情にも開けられる。

そこに居たのは、俺の野生の<sup>嫌な予感</sup>勘の通り、アスナだった。

「……え？なんでいんの、お前？」

何、俺なんかしたっけ？　もしかして変装した人による訪問を装った押し売り？

俺に金がないことはこのボロアパートに住んでいる時点で十分理解してるでしょ？

「新聞なら間に合ってます、お引き取り下さい」

ガチャン！　という音をたて、再び俺の聖域と外界をドアが隔てる……なんか中二

臭いな。

さーて、勉強勉強。あ、その前にマツ缶冷蔵庫から取り出しておこう。

冷蔵庫を開けると、冷気が漏れ、見慣れた黄色い缶がある。タブを開け、缶に口をつ

け、中身の薄茶色の液体を飲——もうとしたところで、小町に頭をどつかれる。

「……何すんだよ……」

床がビシヨビシヨじゃないですか……雑巾雑巾。

「いやー、ごみいちゃんだとは思っていたけど、さすがにここまでだと小町的にポイントマイナスカンストだよ……」

え、なにそれひどい。いつの間に小町に対してのお兄ちゃんの株はそんなに低くなつたの？

「いや、なんで押し売り追っ払っただけでそんな言われなくちゃいけないの？ 妹にまでそんなズタボロに言われるなんて、お兄ちゃんは悲しいよ？」

「ごみいちゃん……眼が腐るだけじゃなくて、ついに視力がなくなつたの？」

「いや、だから、ね……」

押し売りを追っ払ったことを証明しようとして再びドアを開けたら、栗色のロングヘアが……

「……すいませんでした」

何に謝つたのか判らないまま、またドアを閉じる。あれえく？ おつかしいなあ、幻影が見えるよ？

「……なあ、小町。俺、いつの間にこんな精巧な仮想空間に迷い込んだんだ？」

俺が知る限りでは、いくら現実世界に近くても、こんなに感触とかがリアルな仮想世界はなかったはずだが……

「……言っておくけど、ここ仮想世界じゃないからね?」

「ハツ、結城が俺んちに来る確率と、ここまで現実世界を緻密に再現している仮想世界がある確率だったら、断然後者の方が高いぞ」

そもそも桐ヶ谷と行けとメールに打ったはず……メール?

「なあ小町。お前に返信を任せたメール、なんて送ったんだ?」

何の気なしに訊いたが、明らかに体をギクツと強張らせ、少し眼が泳いでいる。

「なあ……」

「そ、それはいいから! 早く外出て、ほらほら!」

強引に話題を転換し、俺を部屋から追い出そうとする。……ホント、なんて送ったんだ?  
だ?

「やだ、行きたくない。押すな」

「もうご飯作りに来てあげないよ?」

「すぐ出ます」

あつさり陥落である。ここで意地張って出まいと抵抗したら、マジで作ってもらえなくなるかもしれない。それだけは避けたい。

適当に上にパーカーとコートを着て、スマホをポケットに入れる。今日は一月十四日……くらいだったと思う。

外出の準備を整えたものの、玄関前からでも漂う冷気にやはり出たくないと思っ  
てしまいが、覚悟を決めて小町の「いつてらっしゃーい」という言葉を背に、扉を  
開放した。

………ら、まず目に入ったのは涙目の幼馴染み、ウンディーネ水妖精、《閃光》、《バ  
ーサクヒーラー》etc etc……まあ、とにかく結城明日奈さんでした。

取り敢えず、俺が諦めの笑みと同時にしたことは一つ……

「本当にスイマセンでした」

土下座である。

……後々よく考えたら、怒られなかったからよかったものの、スカート履いている相手に対して土下座はなかったと思った。